

Title	わが青春のひとコマ：鈴木威先生の思い出
Sub Title	
Author	矢野, 久(Yano, Hisashi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2003
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・文学 No.36 (2003. 3) ,p.112(13)- 110(15)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20030331-0112

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

わが青春のひとコマ

— 鈴木威先生の思い出 —

矢野 久

一九六〇年代末の学園闘争華やかなりしあの時代に、私は京都から東京にやってきた。入学式出席のために日吉講堂に向かつて銀杏並木を歩いたときのあの一瞬を今でも忘れることができない。冬用の衣服を持ち合わせていなかったため、寒さが身にしみた入学式であった。親の反対を押して上京した私は、これからどうなるのだろうと不安を覚えつつも、大学生活が満足のいくものであれば、まあ、自分の中では心の整理はできたはずであった。しかし、残念ながら興味のもてる授業は必ずしも多くはなく、ヘルメット学生のマイクを通しての演説に足を止める中で、第二外国語として履修したドイツ語はまったく新しく興味をそそるものであったことと、ドイツ語の先生が鈴木威先生だったということが非常に大きな意味をもった。

鈴木先生の授業は、単なるドイツ語の授業にとどまることがなく、いろいろなテーマに話題が広がり、收拾がつかなくなることもままあった。宇宙や社会、哲学から思想の話を無我夢中で語る先生の姿が鮮やかによみがえる。カントやヘーゲル、マルクスやルカーチ、『少年マガジン』。鈴木先生の話はそれほど哲学的な省察にもとづいたものではなく、時には表面的であったように思うこともあったが、私にとっては、こうした問題への興味関心を覚まし、また古典をきちんと高校生の時に読んでこなかったという羞恥心を抱かせるには十分な語りであった。確か鈴木先生はあの当時三十代になったばかりの若き師であった。先生は私たちにメッセージを伝えたかったというよりも、ご自分の興味関心から好きなことを語っておられたのだろう、お

そらく。それが私には新鮮だった。

確か二年生の時に鈴木先生の「自由研究」という科目を履修した。何を讀んだのか今ではもう思い出せない。マルクスの『賃労働と資本』はドイツ語の授業で讀んだのか、「自由研究」では何を輪讀したのだろう。鮮明に思い出せるのは、夏の合宿で戸隠へ行つたことである。数日間の合宿では自然といくつかのグループに分かれて行動した。マージャン派、戸隠の山々を歩く肉体派、私たちと年齢があまり変わらなかった美人の奥さん（鈴木先生の）と行動を共にする軟弱派。先生ご自身は第一の派に属していた。というよりは、この派の先頭に立つておられたように記憶する。私は少数派の第二の肉体派にいた。山登りに凝り始めたものこのころからであった。夜は酒を飲みながら、哲学や文学の話で盛りあがった。当時の私は、自分のやることに自信や確信がもてず、何をやっていいか皆目検討がつかなかったこともあつたか、決して論争派ではなかったように思う。

二年生も三田祭のころに私にとってきわめて大きな変化が生じたが、この変化を間接的にもたらしたのは、鈴木先生を中心としたこの学生集団の醸し出す精神的雰囲気

気といつても過言ではない。いろんな学生がいた。それぞれ何かを真剣に考えていた。何を考えていたのか、そのあたりはよくわからなかったが、真摯であつたことだけは伝わってきた。

今となつてはいつだったか思い出せないが、杉田の鈴木先生の自宅に遊びにいったことがある。一匹の犬を鈴木先生ご夫妻が愛する子供に接するが如く、非常に可愛がつておられたことは、大好きではなかった私にとっては一種異様に写つたのも事実であつた。今にして思えば決して奇妙でもなんでもないのだが。子どもさんが誕生して間もないときだったが、その赤ちゃんの可愛がり様もまた大変なもので、鈴木先生はもとより、奥さんの赤ん坊への愛情の注ぎ様たるや、当時の私にとってはまさに驚嘆に値するものであつた。今にして思えばしごく当たり前の愛情表現だったのだが。あれから二十年、よもやあの生まれだての赤ん坊の卒論を讀むはめになるとはまったく思いもよらなかった。

奥さんはピアノを教え、ご自身はヴァイオリンをやり、書道の人でもあつた。これは私にとっては信じられない光景であつた。音楽や芸術、文化とはほぼ無縁な人生を

歩んできた私にとっては、この体験はいろいろな意味で重い問いかけになった。一言でいえば、お前の人生は何なんだ？という問いかけであつたように思う。どのような生きていくのだという問いかけ、この問いかけは当時の日常的世界からの問いかけでもあつた。学園闘争は社会や政治に対する問いかけであり、ヴェトナム戦争に始まり、日米安保の問題、さらには大学のあり方への問いかけであつた。しかし、その問いかけを自分の中でどう処理するのかということとは、たぶんあの当時、みんながそれぞれ自分の中で問いかけており、各人が模索しつつ日常的世界に生きていたのだと思う。

「自由研究」の課題でレポート提出があつたが、私は何を書いていいのかわからなかつた。挙句の果てに、私小説の真似事の、ひどいものを書いて提出した。何とかして取り返さないと恥になると思つていたが、あのレポートは今どうなっているのだろう。実は今でも心を痛めている。焼却されてしまつていることを心から願つている。先生がうっかり、研究室あるいは自宅に放りっぱなしにされていることのないよう願つている。

鈴木先生が定年退職されるといふ実感を今もつて私は

もつことができないでいる。マージャンに目をきらきらさせ、ヘーゲルを熱く語り、マルクスの価値論を妙に簡単にわかりやすく解説され、漫画雑誌にうもれていた鈴木先生は私にとっては先生というよりは、すこしだけ年の離れた兄貴という方が近いのかもしれない。したがつて、先生の定年退職は自分にもそれが近づいているという事実として受け入れねばならないのであらう。

研究者としては私は鈴木先生とは異なる道を歩み、自分の道を好き勝手に進んできている。この道を歩んでいる私の思考の中身というよりは、私のあり様、今日の私を形成している精神的基盤は他でもない鈴木威先生である。専門にとらわれることなく「何か」を学ぶことの大切さを身をもつて示してくれたのが鈴木先生である。今から振り返れば、それこそが私にとっては重要であつた。